

# 翻訳におけるポライトネスと異質化翻訳ストラテジー —日英・日中の翻訳をめぐって—

## Politeness of Translation and Foreignizing strategy of Translation

文学研究科人文学専攻博士前期課程修了

梁 偉 鴻

LEUNG, WAIHONG

### はじめに

本研究はポライトネスという語用論概念を中心に、翻訳に焦点を当てた試論である。ポライトネスとは「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」である（宇佐美 2003：119）。また、Brown & Levinson（1987）はポライトネスを「コミュニケーションにおける対人配慮意識」と定義している。しかしながら、違う文化背景を持つ者同士は、ポライトネスに対する認識が異なるため、言語表現も異なってくる可能性がある。それゆえ、翻訳者にとっては起点言語（原文）および目標言語（訳文）両方の文法、語彙、修辞学に対する知識が要求されるうえ、両言語の語用論的知識も欠かせない。翻訳するときに文章の文字通りの意味だけではなく、言いたいこと（内容と場面を融合したもの）を何とか目標言語に転移してみなければならない。そのためには、起点言語の対話の中の含意とその異文化の背景をよく知らない目標言語の読者に伝える必要が出てくる。そうしなければ、誤訳あるいは意味が伝達できない翻訳が産出される。

ここで翻訳作業を2つの観点から論じたい。まずは翻訳の作業をコミュニケーション行為として見るポライトネスという語用論的な観点、そしてもう1つの観点では翻訳がどのように起点言語の文化を維持して伝えるかを分析することを目的とする。そこで、本研究ではすでに英語や中国語に翻訳された日本語の文芸作品を対象にし、実際に翻訳者が異なる言語のポライトネスに対してどう対応させたのかを考察する。それぞれ異なる言語体系ではあるものの、ここでポライトネスはどのように普遍性を持つかを検証し、翻訳者が異言語・異文化間においてそのポライトネスに対しどう対応させたのかを考察しておきたい。

### I. 1 翻訳の機能等価論 (Functional Equivalence)

翻訳研究において体系的かつ言語学的な理論が欠かせないと主張した先駆者が Nida (1964) である。Nida の論説は言語理論を組み込むことにより翻訳研究において科学的アプローチを行った初めての

試みであった。Nida (1964) は「翻訳の形式よりも内容を重視した、最も自然で最も原文に近い翻訳で、原文の読者が感じるのと、本質的に同じ感じを読者に抱かせるようにするため、縦横無尽に工夫を凝らした表現」と主張する。そこで「形式的等価 (formal equivalence) <sup>1)</sup>」と「動的等価 (dynamic equivalence) <sup>2)</sup>」などの考えが取り上げられる。それ故に、目標言語には起点言語からの干渉の痕跡が見えてはならず、起点文化の「異質性 (Foreignness)」を最小限にとどめなければならないと主張している。したがって、翻訳における表現の自然さを求め、その「異質性 (Foreignness)」を翻訳において抑えるために、文化的な差異なども意識しなければならないと考えられる。

## I. 2 同質化あるいは異質化の翻訳ストラテジー

しかしながら、「翻訳の機能等価論」を批判している翻訳者や翻訳研究者が存在している。特に Venuti は、翻訳ストラテジーを異質化 (Foreignization) と同質化 (Domestication) <sup>3)</sup> の 2 つに分けている。前者は外国文学を外国のものとして訳すことであり、つまり起点文化の異文化的特質を翻訳の中にも保持するためのストラテジーである。後者はその逆で、原文の異文化的特質を目標文化に即した形に馴化させようとするストラテジーのことである。すなわち、翻訳を目標言語に近づけて行くことが同質化で、翻訳を起点言語に近づけて行くことが異質化である。現代の英米商業出版においては、翻訳は「原典としての外国語の文章がある」という事実を隠すかのように英語特有の表現や言い回しを使った流暢な文章で、外国人作家が「もともと英語で書いた文章」のような扱いになっているという (Venuti 1995: 4, 20)。つまり、起点言語由来で目標言語には適さない要素を消去することで、原典の存在は翻訳上には見えてこない。異なる地理的・社会的環境から生じる政治・文化的差異は抜き取られ、英語圏の読者が精通した環境をできるだけ翻訳の中に作り出すことが圧倒的だと Venuti は指摘した。

このような翻訳を生み出す背景にあるのは自民族中心主義 (ethnocentrism) であるとして 同質化を批判し、これに対抗する形で Venuti は自民族逸脱主義としての異質化を提唱する。異文化を体験する場を目指すべき翻訳は、外国語原典が持つ異質性を出すものでなければならない。目標言語にはない起点言語文章上の差異である語彙や統語の言語学的差異から慣習などの文化・社会的差異まであえて

---

<sup>1)</sup> 形式的等価 (formal equivalence) : 語順や文法などの形式と内容両面においてメッセージ自体に注意を集中する (いわゆる逐語訳のこと)。

<sup>2)</sup> 動的等価 (dynamic equivalence) : 翻訳の受容者とメッセージの関係が原文の受容者とメッセージの間に存在した関係と実質的に同一でなければならない (いわゆる意識)

<sup>3)</sup> Foreignization を「異国化」にも、「外国化」にも訳され、Domestication を「内国化」で訳されてきたが、鳥飼 (2008) が指摘しているように、「外国」や「内国」という言葉が「国家」を連想させるが、Venuti は「言語」について論じるもので、「国家」をめぐる議論するわけではない。鳥飼 (2009) が用いた「異質化」「受容化」という訳語を採用しながら、ここで Domestication を「同質化」と訳している。それは「異質化」と同等に合わせようとしているものである。

読者に見せつけることである。これにより、外来文化や非主流文化などの独自性を守ることを目指している。

### I. 3 同質化および異質化のハイブリッド・モデル

そして、文化異質論を継承した Wu (2010) が文化の差異を認識するからこそ起点文化の異質性が翻訳に再現することができることと示唆している。Munday (2000) も情報の流れは起点言語・目標言語により異なることを強調している。また、ただ異質化や同質化ストラテジーだけで翻訳を論じるのは難しい、どのようなストラテジーによって翻訳作業を行うのかは翻訳者のみならず、出版社や翻訳の読者によって左右されると述べている (Liu (2006))。さらに、Wu は起点文化の差異を抹消しないよう、起点言語の語用論的枠組みによる翻訳によって起点言語の独特さを再現することができるとして、起点文化による異質性を目標文化の読者にも伝達できるように翻訳した、以下の例を挙げている：

1.

場面 設定	Jazzi は Bee の父親の彼女である。 Jazzi は Bee に毎朝 5 分早く起きて部屋を片付けるように頼んだが、Bee はそれを拒否しもっと長く寝たいと言った。
----------	---

Jazzi: —Why do you always have to argue?

Bee: —I don't always argue, it's just that I prefer dreaming...

—你怎么总要跟我（顶嘴）争论呢？

—我并不是总要（顶嘴）争论。只是我真的更喜欢做梦...

Wu によると、「顶嘴<sup>4</sup>」と訳せば中国語らしい翻訳ではあるが、ただ「顶嘴」が持っている含意はかなり消極的であり、また英語の言う“argue”とはかなり違っていると指摘している。なぜなら、中国文化においては目下がなるべく目上に対して反論してはいけないからである。しかし、原文がもともとオーストラリアの作品であり、家族全員一人一人が対等な立場をとっていることで、“argue”が中国語と同じ含意が含まれないため、「争论<sup>5</sup>」に訳したほうが適当だと述べている。そのまま「顶嘴」と翻訳すれば、オーストラリアにはないことを中国語の読者に紹介し、それが読者を騙すことになると述べている。前述の He (2001) の研究によれば、起点文化に関わる独特な表現法を犠牲にし、当該メッセージの語用論的等価の効果のみを保留するという類似した研究がある。

翻訳者は異質化ストラテジーと同質化ストラテジーが均等になるように選択しなければならない。また、Wu (2010) によれば、語用論的に異質化ストラテジーは可能であるものの、「情報の流れ

<sup>4</sup> 顶嘴：（多く目上に）言い返す

<sup>5</sup> 争论：論争する、口論する

(Information Flow) 」を目標言語の基準や規範に従わせることが必要であると示唆した。

2. — (原文) Mum built the tree-house, Daniel said.

a. (翻訳案 1) 我妈妈做了树屋, 丹尼尔说。

—My mum built *le* tree-house, Daniel said.

b. (翻訳案 2) 那树屋就是我妈妈做的, 丹尼尔说。

—The tree-house *shi* (was) my mum built *de*, Daniel said.

a.の翻訳は英語の構文的に一致しているが、目的語である“tree-house (树屋)”が文末に位置している。「了 (le)」は英語の過去形を翻訳したものである。それに対し、b.のほうが一般的な翻訳だと指摘している。b が a より原文に近いのは、「是 (shi) ...的 (de)」という過去の行為を示す文型によって、焦点を“my mum”に転じるためである。「お母さんは何をしたの (what did your mum do or (build)?) ?」と話者に聞かれれば、a の訳になるほうが望ましい。だが、ここでなぜ b の訳が理想的な翻訳になるかというのは、話者 Daniel がその“tree-house”を作ったのは自分の母であることを自慢したというコンテキストにあるわけである。

以上のように、直訳は最も異質化ストラテジーに近いものだと考えられる。しかし、直訳および意訳といった概念は Venuti の異質化および同質化に対応しているとも言えるが、両者はぴったり重なるわけではなく、後者の方がより広い概念である。一方的に異質化ストラテジーに頼れば、目標言語の読者にとって読みにくくなることになり、原文のメッセージが伝達できなくなる恐れがある。実際、翻訳は異質化のみが作用するのではなく同質化も作用すると認めている (Venuti 1995 : 29)。いずれにせよ、翻訳過程において柔軟に異文化間の独特性に対応しなければならないと考えられる。

したがって、単純にあるストラテジーがなぜ通用しないのかと訴えるよりも目標文化の状況に応じなければならない。それは要するに欧米が翻訳で異文化に対峙する姿勢と日本のそれとは、ヘゲモニーに組み込む側と組み込まれる側という大きな違いがある (佐藤 2004 : 13)。むしろ、異質化ストラテジーによって、日本文化をより効果的に外国に伝達していくのであろう。

## II ポライトネス

本研究で焦点を当てるのはポライトネスである。ポライトネスとは、会話において、話し手と聞き手の双方の欲求や負担に配慮したり、なるべく良好な人間関係を築けるように配慮して円滑なコミュニケーションを図ろうとする際の社会的言語行動を説明するための概念である。ポライトネスに関する理論の代表は主として、Leech (1983) のポライトネスの原理と Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論が挙げられる。

## II. 1.1 Leech のポライトネス原理

Leech は Grice のいう協調の原理 (Cooperative Principles) の有効性を保つことを説明するために、原理の逸脱をポライトネスの原理として 6 つの原理を設けている。

### 気配りの原則 (tact maxim)

- (a) 他者の負担を最小限にせよ
- (b) 他者の利益を最大限にせよ

### 寛大性の原則 (generosity maxim)

- (a) 自己の利益を最小限にせよ
- (b) 自己の負担を最大限にせよ

### 是認の原則 (approbation maxim)

- (a) 他者への非難を最小限にせよ
- (b) 他者への賞賛を最大限にせよ

### 謙遜の原則 (modesty maxim)

- (a) 自己への賞賛を最小限にせよ
- (b) 自己への非難を最大限にせよ

### 一致の原則 (agreement maxim)

- (a) 自己と他者との意見相違を最小限にせよ
- (b) 自己と他者との意見一致を最大限にせよ

### 共感の原則 (sympathy maxim)

- (a) 自己と他者との反感を最小限にせよ
- (b) 自己と他者との共感を最大限にせよ

## II. 1.2 Brown & Levinson のポライトネス理論

一方、ポライトネスに関して最も大きな影響力を持っているのが Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論 (以下: B&L (1987)) である。B&L (1987) では Goffman (1967) が提唱するフェイスという「肯定的な自己像」の概念を**積極的フェイス (Positive Face)**と**消極的フェイス (Negative Face)**の2種類に区分し、次のように定義している:

- **積極的フェイス**: 他者に受け入れられたい、好かれたいという欲求
- **消極的フェイス**: 自分の領域を他者に邪魔されたくないという欲求

フェイスを脅かす行為を**フェイス脅かし行為 (Face Threatening Acts: 以下 FTA)**と呼ぶ。B&L は FTA を脅かさないように配慮することを、「ポライトネス」と呼んだ。また、B&L (1987:58) によれば、相手とやり取りをする時に、FTA を解消するために、相手に配慮した言語行動を伴い、適切な

ポライトネス・ストラテジーを選択すると主張している。

### ポライトネス・ストラテジー

#### 1. あからさまに FTA を行う (without redressive action, baldly)

これは聞き手からの報復の恐れがない場合に用いられるストラテジーである(例:緊急時、「危ない、頭下げろ!」と乱暴に叫んでも相手は反発しない)。それは聞き手に負担をかけるよりも、むしろ聞き手の利益になるようなものであった場合では、あからさまに表現しても聞き手のフェイスを脅かさないとしている。または、話し手の権力が聞き手よりも強い場合にもあてはまる。

#### 2. 積極的ポライトネス (positive politeness)

積極的ポライトネスは「直接的表現と接近化的表現によって、相手との距離を縮め、相手とともに事柄に直接触れようとする、表現の共感性が特徴となる。」(滝浦(2008))とりわけ、友情関係や連帯感を表すことで、話し手と聞き手の欲求が共通していることを示す時に用いられる。(山岡他(2010))

#### 3. 消極的ポライトネス (negative politeness)

消極的フェイスに配慮するのが消極的ポライトネスであり、積極的ポライトネスと比べれば、消極的ポライトネスの表現手段は、それ専用の言語形式として存在が際立って見える傾向がある。例:日本語の敬語や T/V 代名詞

#### 4. ほのめかし (off record)

事柄を明示的に伝達することよりも、相手の自分のフェイス侵害を避けることを優先し、直接的な言及を避けて、婉曲的に意図を伝えようとするストラテジーである。

#### 5. FTA を行わない (Don't do the FTA)

### FTA の各文化による変化

B&L が提唱した FTA が相手のフェイスを脅かす度合いが FTA 度計算式 (computing the weightiness of an FTA) で示すことができる。

$$W_x = D(S, H) + P(S, H) + R_x$$

#### 変数

$W_x$ : ある行為  $x$  が相手のフェイスを脅かす度合い

$D(S, H)$ : 話し手と聞き手との社会的距離 (distance)

$P(S, H)$ : 話し手と聞き手の相対的力 (power)

$R_x$ : 特定の文化である行為  $x$  が相手にかかる負荷度 (ranking of imposition)

相手との関係や社会的立場と地位がフェイスを脅かす度合いを変化させるという。また、異文化間の文化的差異は  $R_x$  として計算されているため、FTA が文化によって左右される。これはポライトネ

ス研究において B&L の理論の枠組みが多用される要因であろう。それとともに、先述の Leech のポライトネス原理は B&L のポライトネスにおけるストラテジーの 1 つの典型として位置付けることも可能で、相補的關係にあるが評価されている。(山岡他 2010 : 80)

## II. 2 配慮表現

そもそも、「配慮表現」という用語は英語のポライトネス (Politeness) に由来すると考えられる。生田 (1997) は「ポライトネスは当事者同士の互いの面子の保持、人間関係の維持を慮って円滑なコミュニケーションを図ろうとする社会的行動を指す。その意味では、言葉のポライトネスは『配慮表現』、言語的『配慮表現』などと呼ぶほうが適切かもしれない」(p.68) としている。このように、「この論述は日本語における配慮表現研究の実質的な端緒と言えるだろう」と山岡他 (2010 : 82) が述べている。

## II. 3 ポライトネスと翻訳研究

翻訳研究においてポライトネスを援用した研究として、最も代表的なのは Hatim & Mason (1997) である。Hatim & Mason (1997) が映画談話の字幕翻訳や吹き替えにおいて、ポライトネス理論を応用し、翻訳者がいかに対象言語にポライトネスを応用したのかを検証した。Hatim & Mason (1997) は B&L の提唱した FTA が各文化によって異なり、異文化の研究に適切だとしている。

Yeung (2007) が英中・中英翻訳に対し語用論的研究を行い、その中で Leech (1983) のポライトネス原理を中心に翻訳作品の分析を行っている。牛江・西尾 (2009a) は B&L のポライトネスを理論の枠に、洋画の日本語字幕を研究対象とし、原文のポライトネスが日本語字幕においてどのように表現されているか、またそれはどのような原則に従うのか、そして Nida (1964) の言うところの「動的等価」が保持されるのかを研究した。そこで原文のポライトネスと字幕のポライトネスが一致、相違するところがあると示唆した。そこには原文においてポライトネスが表されている場合、または表されていない場合の翻訳表現を別々して分析し、さらに各々のポライトネス・ストラテジーの移行を検証した(例：原文における消極的ポライトネスが翻訳では積極的ポライトネスに変わったり、そのまま維持したりした)。

## III. ポライトネスと異質化翻訳

ポライトネスといった対人関係がそれぞれの文化において、同じようなものや、まったく異なるものもあり、それが各言語使用や表現に反映されている。特に、ある行為の持つフェイスの侵害の度が各文化による話し手と聞き手との社会的距離・相対的力によってずいぶん違う。フェイス侵害の度は積極的ポライトネス文化では低く、消極的ポライトネス文化では高い。「前者はアメリカ西部などを典型し、後者の例としてイギリス、日本(中略)が挙げられる。」(滝浦 2008 : 119)

言うまでもなく、日本における対人関係の扱いは独特であり、それと英語圏や中国語圏と相違するに違いない。ゆえに、対人関係という項目での翻訳者の対応が大事なのである。上述のように、英語への翻訳は概ね同質化ストラテジーによって、異質性を最小限に抑えてしまう。つまり、翻訳は自国の文芸作品の基準や慣習に従うのである。日本文化の独特さが翻訳において失われてしまう恐れがある。さらに、同質化の翻訳は目標言語の読者が日本文化の特質をしっかりと理解することができず、日本の文化や事物を歪曲してしまう恐れがあると考えられる。いずれにしても、外国語文化圏の事物を日本のものを置き換えられるとは考え難い。

また、Venutiによれば、異質化は英語圏において翻訳という自民族中心的な暴力を抑制するという取り組みである。それと同時に、明らかに起点言語の名残であると分かるような直訳から来る語彙的・構造的な日本文化らしさも残る。翻訳文章でしっかり日本文化を英語圏の読者に理解させることこそが異質化ではなかろうか。Venutiは翻訳において言語的および文化的差異を示さなければならないと指摘している。よしもとばなな『キッチン』はBackusの英訳では原作の味の大半が抜け落ちているが、Megan Backus訳の『キッチン』は、日本語の語順や擬声語をある程度保存するといった一種の異質化ストラテジーを採用した翻訳でありながら好評を得ている。

翻訳において同質化あるいは異質化を取るか否かは、その本文や翻訳読者の目標対象および当該文章の目的や実用性（Functional）によるものである。文芸作品とは実用性のある文章と違う。文化の異質性を翻訳に示すことを完全に受け入れない目標言語の文化において、Venutiが以下のように述べている：

*“Foreignising translation signifies the differences of the foreign text, yet only by disrupting the cultural codes that prevail in the target language. In its effort to do right abroad, this translation method must do wrong at home, deviating enough from native norms to stage an alien reading experience.”*

要するに、異質化翻訳は、外国テキストの相違を提示し、目標言語の文化的規範を混乱させる程度で、翻訳の読者にかつてない異国風の読書体験を与えている。外国の物事を示すには、さまざまな方法があり、用語や文体の違いなどが挙げられる。特に、各文化において固有のポライトな言語行動が異なり、ポライトネス・ストラテジーの配慮表現や敬語などといった表現が言語形式に反映しているため、いかにそれを翻訳において異質化として成り立たせられるのかが翻訳者の課題になっている。起点文化の「異質性（Foreignness）」を最小限に止めなければならないという「動的等価」を重視した翻訳は起点言語の文化の特性が損失する一方、異質化ストラテジーによって起点言語の独自の文化価値を翻訳に維持することができる。



### III. 1 既存の翻訳に見られる異質化

起点言語と目標言語が文化的に相違しているとき、翻訳では異質化戦略を採用することが望ましいが、目標言語の言語的特徴のため異質化がなかなか実現することができない。なぜならば、起点言語と目標言語間の言語的特性の差異があまりにも大きすぎる場合があるのである。語彙の流動的であり、今までにない創造に適応する言語体系には異質化を容認することができるが、統語や情報の流れの構造が比較的安定している言語では異質化に抵抗がある場合がある (Wu 2010 : 35)。また、Venuti も翻訳の過程における作業は異質化のみならず、同質化にも関与すると述べている。Wu はまた、起点言語の語用論的かつ文化的コンテクストに基づく原文の異質性を目標言語に移すことが適切であり、なるべく異質化戦略を採用することを主張しているものの、言語の情報の流れなどは目標言語の基準や習慣に従っていけば、翻訳の読者にとって翻訳文の情報を理解しやすくなると主張している。そうしなければ、それはただの直訳になる恐れがある。

『キッチン』の英訳が日本人による評論ではあまり好評ではないが、Venuti をはじめ、Backus 版の英訳は日本語の語順や擬声語をある程度保存され、一種の異質化戦略が用いられている翻訳であると評価が高い。また、そこでアメリカの俗語で置き替えながら、日本語の用語も混じっていると Venuti (1998 : 85) が述べている。Backus の英訳においては、日本語独特の言葉が維持されている (例:ある料理研究家が「先生」と呼ばれているが、そのままローマ字で *Sensei* と表記されている)。日本人の対人関係はどのようにして異質化戦略によって英訳に再現することができるのだろうか。たとえば、青山 (1996) は「懐かしい」という言葉が英語では一致する単語はないので、あえて「*nostalgia*」と訳されていると述べている。

#### 1.

「はじめまして」とほほえみ返すのがやっとなった。

「明日からよろしくね。」と彼女は私にやさしく言うと (中略)

“How do you do,” I replied at last, smiling back to her.

“We are so pleased to have you here.” she said to me warmly,

『キッチン』

これは主人公である「みかげ」が友人の「雄一」の家にしばらく泊まったとき、雄一の母「えり子」が「みかげ」を歓迎する対話である。原文は「明日から」と今後継続的に仲良くやっという意志であり、同じ集団に対する帰属意識を示し、相手に情緒的に訴える積極的ポライトネスの戦略である。英訳の表現は今の喜びを表わすことのほうに重点が置かれているように感じられる。原文の「明日からよろしくね」というのは、共同体の一員として出迎える、受け入れる意味を表わす表現であり、これは英語にはない発想のため、英訳では喜びを表わす表現にしたと推定される (本多

2010 : 5)。その喜びを英語で再現する際、“~be pleased to have somebody here” といった初対面の人を歓迎するという表現によって、日本語の原文のニュアンスを取り入れた異質化翻訳だと考えられる。原文も翻訳も積極的ポライトネスになっている。実際、筆者自身も英語に通訳するとき、「よろしく」でよく困った経験がある。「よろしく」を英語に翻訳するとき、多彩な表現で訳されている。

## 2.

「先生、私、死ぬほど腹が減ったんですけど外出して何かを食べてきていいですか。」

“Sensei” I said, “I am dying of hunger. Do you mind if I go out and get something to eat?”

『キッチン』

取材の同行にしても英語文化圏はこういう場合では外出のことを相手に伝えるだけで済ませるが、ここでは“Do you mind if I go out...” という相手が断りやすいように悲観的態度を示す表現をし、相手にかかる心理的負担をさらに軽減している。そこで日本語の「V-て(も)いいですか」とほぼ等価的であるため、それが消極的ポライトネス・ストラテジーに用いたことによって、日本語の対人関係を英訳に忠実に反映することができる。一般に、英語圏では仕事のために一緒に出張しなければいなくても、夜ではそれぞれ個人の時間であり、別に上司から許可を貰わなくても問題はない。また、「先生」がそのまま音写されている。英語圏では上司との社会的距離および相対的力は自分より高くても、たいてい直接、名前を呼ぶ。Gu (1990 : 25) では中国語・英語における呼称の相違を指摘し、中国語では相手の職名をそのまま相手の呼称として用いることができるが、英語ではそのまま使ってはいけないと主張している。特に主人公「みかげ」は料理教室の仕事が好きで、「先生」との良好な人間関係があるので、英語の慣習に沿って翻訳すれば、先生の名前を訳出するはずである。したがって、ここでは「異質化」ストラテジーを取り入れた翻訳に違いない。

## 3.

「朝帰りの散歩。あなたはかぜが悪そうね。ビタミンCのあめをあげる。」(うらら)

ポケットからキャンディを出して私に渡ししながら、とても透明に彼女はほほえんだ。

「いつもすみません」(みかげ：私)

私はかすれた声で言った。

「熱がたくさんありそう。つらいね。」(うらら)

“I’m on my way home. Your cold is looking worse, you know, Here, I’ll give you some vitamin C candy.” Taking the candy from her pocket, she handed it to me, smiling artlessly.

“You are always so good to me.” I said in a hoarse voice.

“You look like your temperature is very high. You must feel rotten.”

「いつもすみません」という日本語の配慮表現を直接的に英語に訳していない。ここでは英語の《感謝表明》を基準に訳出している。したがって、これは同質化による翻訳である。それにしても、「熱がたたくさんありそう。つらいね。」はしっかり“You look like your temperature is very high. You must feel rotten.”に英語に訳している。特に、“You must feel rotten.”は日本語の繊細さを表出している。それによって、相手への関心といった積極的ポライトネス・ストラテジーを着実に反映することができている。それは翻訳者が翻訳によって失われた（Translation Loss）ところを最小限にしようとするストラテジーだと考えられる。

村上春樹作品の中国語訳について、中国大陸の林少華と台湾の頼明珠が代表的であり、林の訳は中国語文化に沿って「同質化」であるのに対し、頼のほうは「異質化」である。特に林の翻訳は原作の文体とはかなりずれており、四字熟語などが頻出する中国語らしいものになっている。林訳を「濃粧艶抹（厚化粧）」と評したことで中国のメディアが大きく取り上げた。注目すべきところは、「1Q84」より、大陸の訳者は林ではなく、施小偉になったことである。

#### 4.

「悪いけどさ、ラジオ体操は屋上かなんかでやってくれないかな」

“Hey, can you do that on the roof or somewhere?”

大陸版：

“对不起，广播体操在楼顶平台什么地方做好么？”

台湾版：

「不好意思，可以請你到樓頂或其他地方去做收音機體操嗎？」

原文においては、消極的ポライトネスが用いられている。大陸版も台湾版も中国語訳では、原文の消極的ポライトネスはほぼ維持されている。そのため、日本の文化を反映することができ、中国語のポライトネスにも合致している。英語は逆に、英語の文化に沿って、「悪いけどさ」を“Hey”<sup>6</sup>に訳し、日本語の配慮表現の痕跡がなくされているため、同質化ストラテジーによる翻訳だと考えられる。

<sup>6</sup> 『プログレッシブ英和中辞典』によると、“Hey”は「なだめたり弁解したり」する時に用いられると明示している。したがって、それは消極的ポライトネス・ストラテジーになるが、『ジーニアス英和大辞典』ではHeyが「呼びかけ、注意喚起・驚き・喜び・質問・当惑を示す発声。時に失礼な言い方となる」とされている。

*Oxford English Dictionary*によれば、それは“A call to attention; also, an exclamation expressing exultation, incitement, surprise, etc”という解釈を載せてある。そして、*Oxford Dictionary of English*は“used to attract attention, to express surprise, interest, or annoyance, or to elicit agreement”と解釈している。

中国語圏の文化は英語圏よりも日本語のほうが類似するとよく言われているが、「悪いけど」を英語のように「嘿！」あるいは「喂！」と訳しても、文脈上にも意味上にも問題がない。逆にいえば、それは現代中国語の基準に合わせ、あからさまにFTAを行うというストラテジーに合わせるようになる。特に、学生寮の相部屋が親しい関係にあり、社会的距離や相対的力もほぼ同じであり、相手によそよそしさを感じさせないように、相手と呼ぶときには、「嘿！」あるいは「喂！」と発する。

## 5.

「誰にも教わずにこれだけ作れるってたいしたもんだと思うよ、たしかに」

“It’s amazing you could teach yourself to cook so well without having anyone to show you”

大陸版：

“无师自通地做到这个程度，不简单，实在不简单。”

台湾版：

「沒有人教，就能造出這個樣子，我覺得真的不簡單啫，真的。」

『ノルウェイの森』

英語の例は「たしかに」を訳出していないため、英語に近づけるような同質化翻訳になっている。中国語の翻訳では「たしかに」を「实在」あるいは「真的」に訳すことによって、異質化ストラテジーの翻訳が採用されている。しかし、「实在」は副詞として使われ、「不简单」を付けなければならない。「真的」はそのまま独立した表現として用いられ、日本語原文の形に近い表現であり、「異質化」翻訳になっている。

## 6.

「うかがいます」

大陸版：

「愿意洗耳恭听。」

台湾版：

「請告訴我。」

『1Q84 (Book1)』

「うかがいます」はもともと目上の人に対して質問するときに用いられる謙譲語である。上に述べたように、大陸版の翻訳では日本語が目上の人に対して、相手といかに親しい関係を持っていても、自らを謙譲するという日本式の対人関係を目標言語で読者にも伝えられるように、日本語に近い中国語の敬語である「洗耳恭听」を使って、日本語のポライトネスを維持した異質化翻訳である。台湾版では相手を配慮する表現として、「請告訴我。」は「請」を使用した消極的ポライトネスではあるが、「教えてください・話を続けてください」という相手に命令するような《依頼》の表現になってしまう。ここでは「同質化」の翻訳だと考えられる。

## 7.

天吾はボールペンを手にとり、指にはさんで回した。(中略)

「最後まで書きあげて、しっかり書きなおしてからじゃないと、原稿を人に見せないことにしているんだ。それがジンクスになっている」

大陸版：

天吾拿起圆珠笔，夹在手指间旋转。(中略)

“在全部写完，彻底改完定稿以前，我是不把原稿给人看的。那会给我带来厄运。”

台湾版：

天吾拿起原子笔，夹在手指之间转著。(中略)

「不寫到最後，好好重新修改好之後，稿子是不能給別人看的。這是 Jinx，會帶來厄運。」

カタカナで表現している外来語の「ジンクス」は中国語の「厄運」に意識していることで、ほのめかし・ストラテジーを維持しているが、台湾版においてはそのまま英語由来の外来語を一度英語に戻してから中国語の意味を後付けた。原文にある外来語のことを示すことができる。

起点言語と着点言語のそれぞれの文化の差異が言語的ポライトネスに反映することによって、翻訳者はそれを十分に認識せず誤訳をする恐れがある。それは、ポライトネスは普遍的な現象であるものの、フェイスを維持するストラテジーが言語によって違うからである。翻訳者は単なる両言語に対する豊かな知識が必要とされるだけでなく、両言語のもつ語用論的かつ文化的差異に対する意識も欠かせない(Wu (2010))。起点文化の独特性や異質性を維持するために起点言語の語用論的枠組みで翻訳することによって起点言語の独特性を再現することができる。それは原文の持つ「異質性」を抹殺してはいけないのである。ポライトネス及び異質化ストラテジーに基づいた翻訳の行方を以下のように示唆してみる。

### III. 2. 異質化翻訳が直面した諸問題

本節において、翻訳過程におけるポライトネスといった「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動」に対して、どうやって異質化翻訳を採用させるのかを示唆してみる。異質性の導入による翻訳文におけるコミュニケーションの絶断は不適切ではあるが、分からなくても受容される条件があれば、異文化は異質なままでも導入が可能だと言われている。また、「異質な文化要素は、乗り越えなければならないマイナス要因であるとは限らず、未知のものに対する興味や魅力となりえる大きなプラス要因でもある。」(藤濤 (2007: 112)) そうは否定できないものの、果たして異質化ストラテジーによる翻訳はいかに原著のメッセージを読者に伝えるのかを分析してみる。まず、各文化・慣習

と深く関わっている呼称や呼びかけをめぐって、異質化ストラテジーの可能性を探っていく。

### III. 2.1. 呼称

#### 8.

「あなたは直子の担当のお医者さんなんですか？」と僕は彼女に訊いてみた。

「私が医者？」と彼女はびっくりしたように顔をぎゅっとしかめていった。「なんで私が医者なのよ？」

「だって石田先生に会って言われてきたから」

“Are you Naoko’s doctor?” I asked

“Me?! Naoko’s doctor?!” She screwed up her face. “What makes you think I’m a doctor?”

“They told me to ask for Doctor Ishida.”

大陸版：

“你是直子的主治医生么？”我试着问她。

“我是医生？”她显得很惊愕，猛地收紧眉头说，“我怎么会是医生呢？”

“可是人家告诉我找石田老师呀！”

台湾版：

「妳是直子的主治醫師嗎？」我試著問她。

「我是醫師？」她好像大吃一驚似地忽然皺起眉頭說。「爲什麼我是醫師呢？」

「因爲人家叫我先見石田先生啊。」

『ノルウェイの森』

ここで呼称が異言語間の違いによって目立っているのが見られる。日本語原文において、話者の二人に呼称によって誤解が生じた。これは日本語の独特な呼称によって、誤解が生じた好例である。「先生」という呼称が誤解を招くのは、それがいろいろな職業を持つ者に尊敬を示す呼びかけ表現として使用され、特に「学芸に長じた人・学者」、「教育に携わる人、学校教員」、「医師など、その道の専門家、指導的立場の者など」に対する敬称であるからだ。直子は精神病治療が目的で「阿美寮」という施設に入院させられている。「トオル」が直子をお見舞いに行き、施設の管理員が「石田さん」のことを「石田先生」と呼んでいることによって誤解をした。いずれにしても、「先生」という相手へ敬意を示す敬称は消極的ポライトネス・ストラテジーに相当する。

英訳では、「先生」のことを“Doctor”に訳している。英語で“Doctor”という語は患者の診査・治療を職業とする者あるいは大学で最高たる学位を取得した者という意味のどちらかしかないと否定できないが、原文における相手の身分を誤解してしまった場面を英語に訳出することができた。ま

た、この文脈においてすべてを“Doctor”に訳し、翻訳の読者は十分に相手のことを誤解したコンテキストを紹介することができるという効果がある。

しかし、中国語では原文におけるコンテキストを明らかにしていない。台湾版はそのまま「石田先生」と訳して、本来の日本語の表現を再現することができ、原文の場面もしっかり翻訳の読者に伝達することができる。中国語の「先生」も日本語とほぼ同じ意味を持ち、「教員や医者」に対する敬称にも用いられているけれども、大陸版では「先生」のことを「石田老师」に訳している。「先生」という語はある程度地方方言（特に南方）のニュアンスを持っているという指摘があるが、「老师」は「先生」よりも狭義的であり、教員のことを指すしかない。それによって、二人の間の会話は、なぜか相手のことを誤解したことをしっかり反映できなかった。

## 9.

「あなたキズキ君のことも好きだったんでしょう？」

「もちろん」と僕は答えた。

「レイコさんはどう？」

「あの人も大好きだよ。いい人だね。」

“You liked Kizuki, too, didn't you?”

“Of course,” I said.

“How about Reiko?”

“I like her a lot,” I said. “She's really nice.”

大陸版：

“你喜欢本月吗？”

“当然”我回答。

“玲子呢？”

“那人也极喜欢，好人呐！”

台湾版：

「你喜歡 Kizuki 對嗎？」

「當然」我回答。

「玲子姊呢？」

「我也喜歡她啊！是個好人。」

『ノルウェイの森』

まず、「キツキ」という呼称をめぐって英語訳と台湾版中国語訳は忠実に翻訳に反映している。したがって、それらは異質化翻訳である。しかし、大陸版では「キツキ」を簡体字中国語に直している。原文の人物である「キツキ」という名前の漢字表記は一切不明であるため、漢字に直すのは読者に翻訳の誤った情報を与えてしまう。日本人の名前には漢字で表記するものもあり、仮名で表記するものもある。中国語の習慣では日本人の名前を全部漢字に直す習慣があり、大陸の中国語話者はアルファベットを読めないわけではないので、大陸版の翻訳は同質化ストラテジーを採用している。一方、「レイコさん」を異質化ストラテジーで目標言語で紹介するのは簡単に解決できないと考えられる。Yeung (2007) の翻訳におけるポライトネス原理には、他者への呼称や呼びかけに関する次のような原則がある。

- 呼称の原則 (MAXIM OF ADDRESS)
- (a) 他者への敬意を最大限にせよ
  - (b) 自分と他者との仲間意識を最大限にせよ

直子にとってレイコさんは親しい関係を持ちながら、目上の存在である。しかし、直子は相手のことを「姉さん」あるいは「姉ちゃん」とは呼ばない。これは直子が相手への敬意を最大限にしているが、自分と他者との仲間意識を最大限にしている。最も敬意を示すのであれば、「レイコさん」ではなく「石田さん」と呼ぶ。相手が目上でありながら、相手との距離を縮めようとする話者が相手のことを「レイコさん」と呼ぶのは積極的ポライトネスである。

英訳において英語の習慣に沿って親しい関係を持っている相手を指す語として「Reiko」になっている。なぜなら、英訳を“Ms. Reiko”に直せば、原文に示している「直子」と「レイコ」の親しい関係を反映することが不可能になってしまう。英語に関する呼称の選択を決める要素について、以下の構図を参考にする。

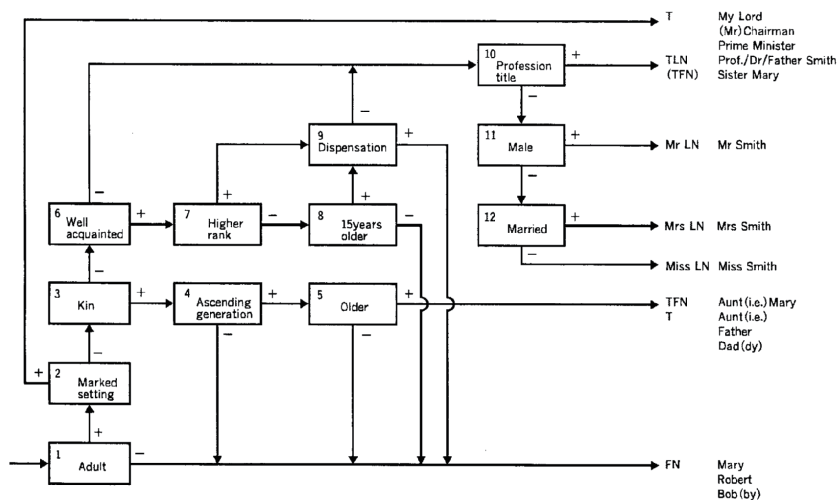


図1 英国英語における丁寧な呼称の選択を決める要素構図 出典：Holmes (2008 : 281)



このようにして、英訳において「レイコさん」を“Ms. Reiko”と訳してはいけない原因が明らかになった。とりわけ、イギリス英語の場合では、“Ms.”、“Mr.”は親しい関係を持っている人には使わない。

大陸版の中国語翻訳では簡単に「～さん」というところを省略している。台湾版においては「レイコさん」を「玲子姊（レイコ姉さん）」と訳している。Zhan (1992)によれば、これは話し手が積極的に相手との社会的距離を縮小させ、親密かつ好感を示す積極的ポライトネス・ストラテジーである。

「先生、私、死ぬほど腹が減ったんですけど外出して何かを食べてきていいですか。」

“Sensei” I said, “I am dying of hunger. Do you mind if I go out and get something to eat?”

先述の例文 2 において、異質化ストラテジーを取った翻訳ではあるが、“Sensei”という相手への敬称は音写のまま英語に移されている。しかし、これだけでは英語母語話者にとって“Sensei”が相手の名前だという誤解を招く。“Sensei”を「学問や芸術などを教える人」という意味を有する“Mentor/Master”に改訳すれば、話し手が相手への尊敬を表すという原文にある消極的ポライトネス・ストラテジーが維持でき、異質翻訳による効果を実現することができる。ここで英語における異質化の翻訳に近い例となるが、ただし“Mentor/Master”は多少ネガティブ・イメージを持っているので、文化的先入観を引き起こしかねないという問題点が残る。

### III.2.2. 対人関係

ポライトネスという人間関係を円滑にするための言語ストラテジーがあり、それは各文化における話し手と聞き手との間の対人関係によって差異がある。それに関して異質化の可能性を再検討しなければならない。

#### 10.

「いつもすみません」(みかげ：私)

私はかすれた声で言った。

「熱がたたくさんありそう。つらいね。」(うらら)

“You are always so good to me.” I said in a hoarse voice.

“You look like your temperature is very high. You must feel rotten.”

『キッチン』

これは異質化による翻訳だと言えるが、“You are always so good to me”というところが結果として同質化に当たっている。そこでなるべく異質化ストラテジーを取れば“Thank you! But sorry to make you

so worry about me.”と翻訳される。そうすれば、日本語本来のポライトネスをきちんと英語に提示し、さらに英語の読者に日本人の対人コミュニケーションの異質性を紹介することができる翻訳になる。また、三宅（1992）によれば、「イギリス人は感謝表現のほかに感謝表現の後に詫び表現を付加するもの」だと指摘している。したがって、筆者がここで提案したのが日本語に接近している翻訳でもあり、イギリス英語に近いものとなっている。

## 11.

「みんな、あんたもまだいると思って、(中略)でも、生きていてよかった。(省略)」

“Everyone thought you were still living with her...God, I'm glad to see you're all right...” (Emmerich 訳)

“Anyway, how great to see you (come) alive!” (筆者訳案)

### 『ハードボイルド／ハードラック』

原文は聞き手に対する関心を示している。また、相手の状況を楽観視している。ゆえに、それは積極的ポライトネスである。Emmerichの翻訳は話し手が相手に対する楽観的な態度を英語訳に反映している。ただし、“God”は若干日本語の言語使用の基準からずれている。“God”は英語においてごく普通の感嘆詞ではあるものの、その表現は本来キリスト教に由来する表現であり、日本語の文化にはキリスト教とあまり関わっていない。そして、原文は明らかに「でも」しか表わされていない。そのため、「でも」を“anyway”に訳するのが適当であろう。さらに、“how great to see you (come) alive”によって話し手は相手が健在していることに対して喜びを示し、安心したことと表わす。特に、“alive”はただ生きていくという意味だけではなく、相手が元気になっていることという意味も持っている。

## 12.

「あなたのところにとめてもらう」とふかえりは言った。

大陸版：

“我今晚住在你那里。”深绘里说。

台湾版：

「到你家住。」深繪里說。

「(我)想到你家住。」(筆者の訳案)

### 『1Q84 (Book1)』

相手に依頼することは話し手と聞き手双方のFTAになるため、原文の話者が「Vてもらう」という配慮表現によって恩恵を受けているという話し手の認識を示している。それは「依頼」の内容を授受受動化し、相手の判断を受身的に受け入れる積極的配慮になっているのである。「ふかえり」はディスレクシアという障害を持ち、独特な家族背景によって他者との会話はあまりうまくいかない。大陸版はかなり完全な文になっている形をとり、ふかえりの特徴が多少異なっている。また、「今晚」を

挿入し原文にない語を入れている。台湾版ではほのめかしに変わり、ふかえりの特徴を翻訳において反映することができる異質化翻訳である。さらなる異質化戦略に近づこうとすれば、「(我) 想到你家住。」という原文と相応する配慮表現をとった形に訳すことが望ましい。原文は〈要求〉系の依頼表現であるが、筆者の提案では「我想 V (話し手の動作)」という〈願望表出〉系に属している。ここでの提案は《依頼》における配慮表現は起点言語と異なることにより、同質化戦略の翻訳になりがちである。ところが、ここで「とめる」ことは話し手が行う動作であり、I.3 の例 2 と同じように、焦点を話し手に当てるようになり、原文における「ふかえり」と聞き手との信頼関係というコンテキストを説明することができる。

このように、翻訳過程において原文の文化を持っているポライトネスを理解するために異質化戦略を採用しているものの、結果としてある程度同質化翻訳となっていることがわかった。それは異質化戦略にもたらす意外な結果である。

#### IV. おわりに

本稿では、日本語を起点言語として目標言語に翻訳する過程において、異言語間のポライトネス・戦略に注意しながら、異質化戦略によってなるべく起点言語の対人コミュニケーションを目標言語に反映することを勧めている。それはポライトネスといった「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動」は起点言語の文化が含まれており、異質化戦略によってその文化の異質性を反映しなければならないからである。また、翻訳者は異質化戦略によって外国の物事や文化を目標言語に紹介する役割を果たさなければならないのである。

翻訳文は翻訳者によって異なる解釈がなされた可能性もあり、文芸作品はあくまでも作者の独特な文体や用語で、日本語ではあまり使われないものもある。しかし、「日本語を母語とし、日本の歴史・文化・社会・慣習・感性、そうしたすべてのものを背負った作者が原作を書いたように、英語を母語としその文化的・社会的背景が血肉となっている翻訳者が翻訳をおこなっている。そのかぎりにおいて一つの原作と一つの翻訳との比較対象は十分意味のあることだ。」(北條 2004 : 138) これは本研究の価値があるところでもある。そして、本研究において言語学を取り入れる翻訳(研究)の可能性が再確認することができ、ポライトネスの研究や配慮表現の対照言語学研究などが異文化コミュニケーションに関わる研究に有益であるといえよう。

異質化翻訳は文章としては原文忠実主義にも見えるものの、その背景にはより壮大なイデオロギーとしての自民族逸脱主義が存在している。要するに、起点言語に比べて圧倒的に優位な文化が目標言語になれば異質化翻訳の効果は生まれない。こうした文化であるとき、初めて異質化翻訳が目標言

語の安定したシステムを揺さぶる可能性をはらみ、より他者性を受容する文化へと変わることができる（玉置 2005 : 240）。つまり、目標言語文化が起点言語文化より優れているとすれば、この訳語、ひいてはこの訳文によって目標言語文化の単一で均質な文化を揺さぶる可能性を持つことができるかが重要である。本稿においてその視点の分析を行うことができなかつた。これを今後の課題としておきたい。

## 参考文献

- Baker, M. (1992) *In Other Words: A coursebook on Translation*, London and New York: Routledge.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness. Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Geyer, N. (2008) *Discourse and Politeness – Ambivalent Face in Japanese*, London and New York: Continuum.
- Goffman, E. (1967) *Interaction ritual: essays on face to face behavior*, Garden City.
- Gu, Y. (1990) 'Politeness phenomena in modern Chinese', *Journal of Pragmatics* 14:2, 237-257.
- Hatim, B. and Mason, I. (1997) *The Translator as Communicator*, London and New York: Routledge Taylor & Francis Group.
- Hatim, Basil, and Mason, Ian (1997) "Politeness in Screen Translating", in Lawrence Venuti & Mona Baker, (eds.) *The Translation Studies Reader*, London, Routledge, 2000, pp. 430-45.
- Holmes, J. (2008) *An Introduction to Sociolinguistics Third Edition*, Harlow: Pearson Longman.
- He, Z (2001) Pragmatics, in Chan, Sin-wai & Pollard, David E. (eds.), *An Encyclopaedia of translation: Chinese-English, English-Chinese*, Hong Kong: Chinese University Press, pp. 835-845.
- House, J. (1998) "Politeness and Translation", in L. Hickey, (eds.) *The Pragmatics of Translation*, Clevedon: Multilingual Matters, pp. 54-72.
- Ide, S. (1989) "Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness", *Multilingua* 8, 223-248.
- Kakutani, M. (1993) "Books of The Times; Very Japanese, Very American and Very Popular", *New York Times*, 12 January, p.15
- Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*, London: Longman. (邦訳：池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『英語語用論』紀伊国屋書店)
- Leech, G. (2005) 'Politeness: Is there an East-West divide?', *Journal of Foreign Languages*, Shanghai, 6, 3-31. A revised version has been published in: *Journal of Politeness Research*, 3.2 (2006), 167-206.
- Liu, Z.Q. (2006) *Domesticating or Foreignizing? Translations of Titles and Honorifics in Hong Lou Meng*, PhD Thesis, National University of Singapore.
- Matsumoto, Y. (1989) "Politeness and conversational universals-observations from Japanese", *Multilingua*, 8, 207-221.
- Munday, J. (2008) *Introducing Translation Studies Second Edition*, London: Routledge. (邦訳：鳥飼玖美子訳 (2009) 『翻訳学入門』みすず書房)
- Nida, E. (1964) *Towards a Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*, Leiden: E.J. Brill (邦訳：成瀬武史訳『翻訳学序説』開文社)
- Pan, Y. (2000) *Politeness in Chinese Face-to-face interaction*, Stamford: Alex.
- Venuti, L (1995) *The Translator's Invisibility: A History of Translation*, London and New York: Routledge.
- Venuti, L (1998) *The Scandals of Translation*, London and New York: Routledge.
- Venuti, L (ed.) (2004) *The Translation Studies Reader*, London and New York: Routledge, 2<sup>nd</sup> edition.
- Wu, G. (2010) "Translating differences- A hybrid model for translating training", *The International Journal for Translation & Interpreting Research* Vol2, No.1, pp24-37.
- Yeung, K.W. (2007) *Pragmatics and Translation: with reference to English-Chinese and Chinese-English examples*. PhD thesis, University of Hong Kong.
- Zhan, K. (1992) *The strategies of politeness in the Chinese language*. Berkeley: Institute of East Asian Studies, University of California, Berkeley.

- 青山南 (1996) 『英語になったニッポン小説』 集英社
- 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」 『言語』 特集①、66-71
- 磯谷孝 (1980) 『翻訳と文化の記号論—文化落差のコミュニケーション』 勁草書房
- 稲永知世 (2009) 「社説記事における positive politeness strategies」 『言語文化研究 (言語情報編)』 2009・3 第4号 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科
- 宇佐美まゆみ (2001) 「21世紀の社会と日本語—ポライトネスのゆくえを中心に」 『言語』 Vol.30 No.1、大修館書店、20-29
- 宇佐美まゆみ (2002) 「「ポライトネス」という概念」 『月刊 言語』 Vol.31、No.1、大修館書店、100-105
- 宇佐美まゆみ (2003) 「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」、『国語学』 第54巻3号、日本語学会、117-132
- 牛江ゆきこ・西尾道子 (2009a) 「英語映画の日本語字幕ポライトネス」 『翻訳研究への招待』 日本通訳翻訳学会
- 牛江ゆきこ・西尾道子 (2009b) 「日本語映画の英語字幕ポライトネス」 『翻訳研究ジャーナル』 日本通訳翻訳学会
- 小倉慶郎 (2008) 「異化と同化の法則 : foreignization と domestication はいかなる条件で起こるのか」 『言語と文化』、第7号、大阪府立大学、51-70
- 北條文緒 (2004) 『翻訳と異文化—原作との〈ずれ〉が語るもの』 みすず書房
- 小林隆・篠崎晃一 (2010) 『方言の発見—知られざる地域差を知る』 ひつじ書房
- 佐藤美希 (2004) 「日本語翻訳における foreignization と domestication のストラテジー : オスカー・ワイルドの作品翻訳をめぐる」 『国際広報メディアジャーナル』、第2巻、北海道大学大学院国際広報メディア研究科、185-203
- 高原脩・林宅男・林礼子 (2002) 『プラグマティックスの展開』 勁草書房
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』 大修館書店
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 研究社
- 滝浦真人 (2010) 「ポライトネスと語用論—“はだかの命令形”の考察から—」 『日本語研究の12章』 明治書院、181-195
- 竹島金吾 (1990) 『練習中心 トレーニング中国語』 白水社
- 玉置祐子 (2005) 「FOREIGNIZATION (異化) — 理論と実際—訳文の語彙を中心に—」 『通訳研究』 日本通訳学会、239-254
- 林宅男 (2008) 『談話分析のアプローチ 理論と実践』 研究社
- 平子義雄 (1999) 『翻訳の原理—異文化をどう訳すか』 大修館書店
- 藤濤文子 (2007) 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション』 松籟社
- 北京大学外国語学院・創価大学文学部編 (2004) 『日本語文化研究』 第五集、学苑出版社
- ト雁 (2004) 「呼称におけるポライトネス心理考察 : 親族呼称の虚構的用法に関する日・中・英語比較」 『淑徳大学社会学部研究紀要』 38、淑徳大学 313-328
- 彭飛 (2004) 『日本語の「配慮表現」に関する研究—中国語との比較研究における諸問題』 和泉書院
- 本多優美 (2010) 「日英語対象研究を通してみる定型表現『よろしく』の多様性」 『清心語文』 第12号、ノートウダム清心女子大学日本語日文学会 70-82
- 南部みゆき (2010) 「ポライトネス研究における概念と理論的背景のまとめ」 『熊本大学社会学研究』 第8巻、熊本大学、205-229
- 三宅和子 (1992) 「『感謝』と『詫び』にみるアメリカ人とイギリス人の言語行動」 『言語行動報告』 荻野綱男編 筑波大学 243 - 260
- 三宅和子 (1993) 「感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム」 『筑波大学留学生センター論集』 第8号、筑波大学 19 - 38
- 山岡政紀 (1990) 「授受補助動詞と依頼行為」 『文藝言語研究. 言語篇』 第17巻、筑波大学、19-33
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』 くろしお出版
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門—』 明治書院
- 山本裕子 (2003) 「授受補助動詞の対人的機能について」 『名古屋女子大学紀要』、49、名古屋女子大学 269—283
- 山本もと子 (2003) 「感謝の謝罪表現「すみません」—「すみません」が感謝と謝罪の両方の意味を持つわけ—」 『信州大学留学生センター紀要』 第4号、信州大学 1-13

## 使用辞書

- Hornby, A. S. et al (2005) *Oxford Advanced Learner's Dictionary Seventh Edition*, Oxford: Oxford University Press.  
Simpson, J & Weiner, E. et al (1989) *Oxford English Dictionary Second Edition*, Oxford: Oxford University Press.  
Soanes, C & Stevenson, A et al (2004) *Oxford Dictionary of English Second Edition*, Oxford: Oxford University Press.  
小西友七・南出康世(編) (2001) 『ジーニアス英和辞典』大修館書店  
北原保雄(編) (2002) 『明鏡 国語辞典』大修館書店  
国広哲弥・堀内克明・安井稔(編) 『プログレッシブ英和中辞典』第4版 小学館  
小学館国語辞典編集部編 (2000) 『日本国語大辞典』小学館  
北京商務印書館・小学館(編) (2002) 『中日辞典』小学館  
北京對外經濟貿易大学・北京商務印書館・小学館(編) 『日中辞典』小学館  
松岡栄志・白井啓介・樋口靖・代田智明(編) (2001) 『クラウン中日辞典』三省堂

## 用例出典

- 田村裕 (2007) 『ホームレス中学生』ワニブックス (中国語訳大陸版: 吴季伦译『无家可归的中学生』上海世界出版)  
村上春樹 (1987) 『ノルウェイの森』講談社 (英訳: translated by Rubin, J. (2003) *Norwegian Wood*, Surrey: Vintage. / 中国語訳大陸版: 林少华译『挪威的森林』上海译文出版社 / 中国語版台湾版: 頼明珠譯『挪威的森林』時報出版)  
村上春樹 (2009) 『1Q84 (Book 1)』 (中国語訳大陸版: 施小焯译『1Q84(Book 1)』新经典文化 / 中国語訳台湾版: 頼明珠譯『1Q84(Book 1)』時報出版)  
よしもとばなな (1988) 『キッチン』福武書店 (英語訳: translated by Bakus, M. (1993) *Kitchen*, London: Faber & Faber.)  
としもとばなな (2001) 『ハードボイルド／ハートラック』幻冬舎 (英語訳: translated by Emmerich, M, (2005) *Hardboiled Hard Luck*, London: Faber & Faber.)